

第Ⅱ章 遺跡の環境

第1節 地理的環境

1 遺跡周辺の地形

舟木遺跡は、瀬戸内海の東端に位置する淡路島に所在する遺跡である。(図2-1参照) 遺跡の性格を理解する上で、この遺跡が所在する“島”としての環境が重要であると考えられるため、まずは淡路島の位置と地形について概観し、その後その“島”の中での遺跡の環境について述べることにする。

淡路島は、南北約55km、東西約28kmの本島と南方約4kmに浮かぶ外周約10kmの沼島で構成される。島の面積は595.63km²で、瀬戸内海では最大の面積を有する島である。島を囲む海は、東は大阪湾、西は播磨灘に面し、南は紀伊水道から太平洋につながる。大阪湾を隔てた対岸には摂津・河内・和泉、播磨灘を隔てては讃岐・播磨さらに吉備、紀伊水道を隔てては紀伊・阿波などの地域と海を介して接することとなる。本州及び四国との間には潮の流れが速く複雑な明石、鳴門、紀淡の三つの海峡が存在する。これらの海峡は、歴史上、瀬戸内海を介するこれら地域の交流に大きな関門となった可能性が高く、その中央に位置する淡路島は、瀬戸内海上交通路の要衝となっていたことが想像できる。

一方、島の地形は、中央部を横断する先山南麓と湊を結ぶ線をもって南北に二分される。島南部には、標高608mの諭鶴羽山を最高峰とする山地と標高273mの南辺寺山の二つの山塊が存在し、そこを源流とする倭文川、成相川、三原川、大日川等の河川が島内最大の面積を有する三原平野を形成する。それに対して、島北部は山地や丘陵が大半を占める。島北部の中央を南北に貫く津名山地は、標高515mの常隆寺山や522mの妙見山を最高峰とし、北端から中央部まで連なる山塊で構成される。その東西には山地に沿って小さな起伏を持ったなだらかな高原状の丘陵地帯が連なり、この丘陵は直接海に落ち込む場所が多く、大きな平野は認められない。このような島の地形を形づくるのが活断層である。島北部中央を南北に貫く山地は、東西の海岸部を南北に走る断層の活動により隆起した地形である。急峻な山地と丘陵地帯との間には急傾斜の断層崖が存在し、それを境として地形が大きく異なっている。なだらかな丘陵地帯には現在も多くの集落が営まれており、各時代の遺跡もそこに営まれるものが多い。南北の断層と直交する東西に走る断層は山地を横切る地溝帯を形成し、それに沿って形づくられるなだらかな地

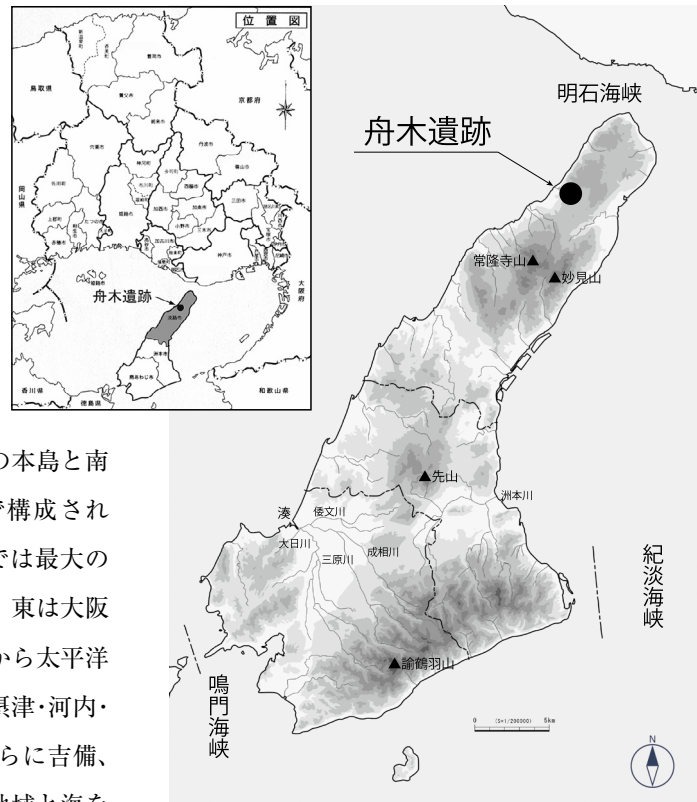


図2-1 舟木遺跡の位置



図2-2 舟木遺跡の上空から野島方面を望む

形は、東西の海岸部を結ぶ重要な陸路として利用され、現在も、島の東西を結ぶ幹線道路が走っている。

舟木遺跡は、このような地形的特質を有する淡路島の北部、津名山地の西側に広がる標高150m～200mの丘陵上に位置する。この丘陵を形づくるのは平成7（1995）年に兵庫県南部地震を起こ

した野島断層（図2-3参照）である。現在、国指定天然記念物として野島断層を保存する断層保存館から見上げる丘陵上に遺跡は位置している。直線距離で約2kmの西海岸には、万葉歌人によって詠まれた歌が数多く残る“野島”があり（図2-2）、かつては明石海峡を通過する潮待ちの港として利用されたものと考えられている。一方、東方向へは、津名山地を横断する地溝帯が伸びており、そこを縫って走る県道71号線は東西海岸を結ぶ幹線道路の一つとして利用されている。東海岸までの距離は約4kmである。

遺跡の地形は、南北に走る2本の尾根筋とその間をつなぐ丘陵に囲まれた小さな盆地となっている。したがって、播磨灘を見下ろす丘陵上に位置する遺跡ではありながら、遺跡中心部からは海を望むことはできない閉鎖的な環境に営まれている。その点では、瀬戸内海の島嶼部の遺跡によくみられるような海への眺望を有する遺跡とは異なっている。盆地を形づくる東の尾根裾には明瞭な地形の変換点が存在し、急峻な斜面は遺跡の東限を画するものとなっている。西にはその尾根と並行して走る尾根筋を画する深い谷が存在し、遺跡の西限となっている。盆地の中心に位置する棚原大池は、周囲の尾根の間を流れる谷筋の水を堰き止めたもので、堤から下流に続く谷は西海岸の野島地域に繋がっている。現在も谷伝いにつながる道に残る道標は、舟木地域と野島地域を結んだ古道の存在を裏付けるものでもある。遺跡南端の丘陵裾にも南限を画する谷筋が存在するが、さらにその南にも弥生時代の遺跡群が連続しており、これらの遺跡をたどれば大阪湾を臨む東海岸につながるることとなる。

2 遺跡周辺の地質

南北に二分される島の地形は、地質構造の違いを反映したものでもある（図2-3参照）。島北部の地質は、六甲山系から連なる領家花崗岩を基盤層とし、その上部に堆積した神戸層群や大阪層群が一部に分布する。島西部の富島から育波に伸びる浅野断層に沿って大阪層群が広く分布し、標高100～200mの丘陵を形成する。一方、島の南端にそびえる論鶴羽山地は、和泉から讃岐へと連なる山脈と一体となる和泉層群を基盤とする地質構造を有する。これらの山脈は、紀伊半島から四国に連なる中央構造線の活動によって形成された地形である。

中央構造線の南に位置する沼島の地質構造は本島とは異なり、三波川変成帯に属する結晶片岩を基盤層とする。

遺跡の地質構造は、花崗岩を基盤層とし、一部にその上部に堆積する大阪層群で構成される丘陵が存在する。遺跡範囲及び周囲の尾根を構成する基盤層は花崗岩やその風化土の堆積を基本とするが、その中に大阪層群が露頭する個所が存在し、発掘調査によって遺構が検出できる遺構面も地区によって土質が異なる。この大阪層群舟木礫層は、主体となる礫層のほか、砂及びシルト、粘土の互層で構成される。礫層は中～大礫サイズの円亜角礫を主体とし、砂岩、酸性火砕岩類、石英斑岩、チャート、

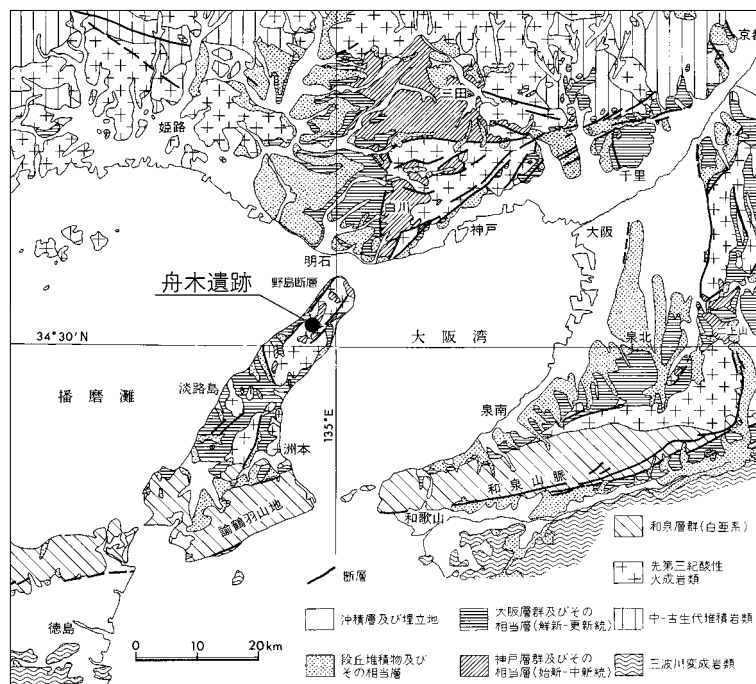


図2-3 舟木遺跡の位置と周辺の地質

「明石の地質」1990を一部改変

花崗岩、結晶片岩、安山岩などを含むとされる。遺跡で出土する石器の材質も、これらの礫種と一致するものが主体を占めており、遺跡周辺で産出する礫を使用していることも想定できる。なお、遺跡中央部に位置する石上神社の磐座は、基盤となる花崗岩の一部が露頭した巨石である。

3 遺跡周辺の気候

島の気候は、年間平均気温が15～17℃で、冬季においても0℃を下回ることが少ない温暖な気候である。年間平均降水量は概ね1,000～1,500mm前後で、温暖少雨の瀬戸内海気候に属する。中央部に山地が連なる島北部では、大阪湾を臨む東海岸と播磨灘に面する西海岸では冬場の気候に大きな違いがみられる。西からの季節風を遮る山地を背負った東海岸は、冬場も温暖な気候に恵まれる日が多くなっているが、西の播磨灘に開けた西海岸の冬場は西からの強い季節風が吹き付ける気候となっている。この気候条件の違いは、地域ごとの多様な生業や産業の展開を促し、土地利用を規定するなど、島の文化をより多様なものとしてきた。遺跡は、この西海岸に面した丘陵上に位置することから、冬場には播磨灘から吹き上げる西風によって厳しい生活環境を強いられたことも想像できる。

参考文献

- 北淡町 1975『北淡町史』
- 水野清秀ほか 1990『明石地域の地質』地質調査所
- 高橋浩ほか 1992『洲本地域の地質』地質調査所
- 樽野博幸 1988「地形と地質」『津名町史』津名町
- 植松剛・樽野博幸 2000「自然と風土」『東浦町史』東浦町

第2節 歴史的環境

1 縄文時代以前

舟木遺跡が所在する淡路島北部の歴史は、現在のところ明石海峡を眼前に望む島北端部に位置するまるやま遺跡で出土したナイフ形石器や細石刃・細石刃核など旧石器時代後期の石器群を最古の遺物として始まることが知られている。同遺跡では、続く縄文時代草創期に使用された有舌尖頭器も出土しているが、この石器は舟木遺跡でも確認されており、周辺の丘陵部でも当時、人の活動があったものと想定できる。

平均気温が上昇し、豊かな自然環境の中で定住生活が営まれたと考えられる縄文時代には、それを裏付けるように海岸部で長期間継続した遺跡が確認されている。播磨灘に面する西海岸では、育波堂ノ前遺跡で、押型文土器が出土する早期に始まり前期から晩期に継続する集落が営まれていたことが知られている。また、大阪湾に面する東海岸では、数多くの貯蔵穴や竪穴住居跡などが検出された後期を中心に、早期末から晩期までの長期にわたる生活の跡が確認された佃遺跡が知られている。舟木遺跡においても後期の土器片3点が発見されているほか、石鏃などの石器が出土している。現在のところ定住したような遺構は確認されていないものの、何らかの活動があったことは確実と考えられる。

2 弥生時代から古墳時代

現在、淡路島内で確認されている弥生時代の遺跡は485遺跡を数える。(詳細は『舟木遺跡1』を参照)その内、前期の土器が出土する遺跡は小規模な河川が海岸に流れ込む河口付近に確認されている。これら前期の遺跡の数は27遺跡で、縄文時代から増加する傾向にある。前期の土器が出土する遺跡の中には、前述の育波堂ノ前遺跡や佃遺跡など縄文時代から継続する遺跡も知られるが、現在のところ、それら遺跡における前期の遺構は希薄な状況である。そのような中、大阪湾を臨む志筑の平野部では、水田稲作の始まりを示す大陸系磨製石器が出土する天神遺跡が確認されており、前期から中期にかけて大きな溝や竪穴住居が営まれたムラの存在が知られている。しかしながら島北部では、島南部の三原平野に営まれた平石遺跡や雨流遺跡、井手田遺跡、島中央部の洲本平野に営まれた下内膳遺跡などにみられるような広い平野を背景とする中期から後期にも継続する拠点的な集落は認められず、小規模な遺跡が多い。この状況は、島北部に水田稲作に適した大きな平野の発達が進められないことに起因する可能性がある。その状況を反映するかのよう、島南部を中心に数多く発見されている銅鐸や銅剣などの青銅器も、島北部においては江井崎出土と伝えられる銅鐸以外は知られていない。

このような遺跡の状況は、後期になると大きく変化する。中期末に47遺跡であった遺跡数は、後期には187遺跡に増加する。その傾向は島北部に顕著であり、遺跡の立地も丘陵上へと移行していく。(図2-4参照)中期末ころから出現する丘陵部の遺跡は後期初頭から増加しはじめ、後期後半にピークを迎える。その数は平野に営まれた中期の遺跡の10倍にも達する。その中には、五斗長垣内遺跡のように鉄器生産を営む遺跡や二ツ石戎ノ前遺跡のように水銀朱の精製に関係する遺跡などが認められる。しかし、これら丘陵上に急増した遺跡は終末期に減少しはじめ、古墳時代前期には姿を消してしまうといった推移をたどる。舟木遺跡もそれら遺跡の一つであるが、周辺には尾花遺跡や夏池遺跡、将監遺跡、岩ノ久保遺跡などの弥生時代の土器が出土する遺跡が知られている。

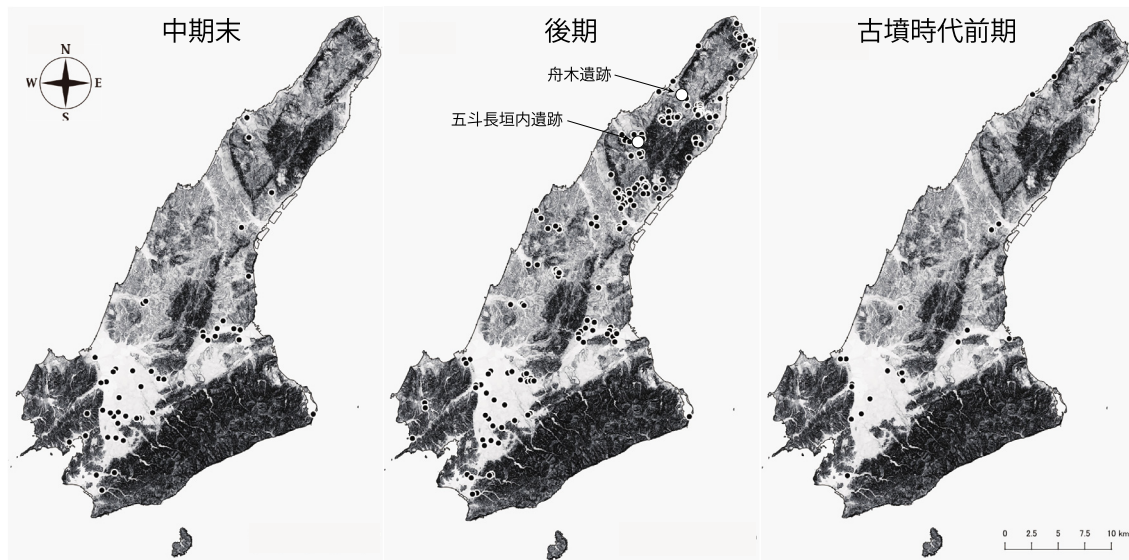


図2-4 淡路島における弥生時代後期を中心とする遺跡分布の変遷（終末期を除く）

また、当該期には土器製塩を行う遺跡が出現する。島北部の西海岸に位置する富島遺跡や畑田遺跡で、弥生時代後期後半の製塩土器が出土しており、現在のところ島内最古段階の製塩土器と位置付けられている。これらの遺跡は、舟木遺跡が立地する丘陵の麓に位置しており、舟木遺跡との距離はおよそ2～3kmである。終末期には遺跡数が増加し、島内各地で確認される遺跡は土器製塩が本格化する様相を示している。当該期の製塩土器は舟木遺跡でも出土しており、内陸部に運ばれた塩が集落で使用された様子を知ることができる。古墳時代には、大阪湾側の海岸部で確認されている引野遺跡で、中期に丸底化した製塩土器を使用した量産化の傾向をみることができる。また、西海岸の貴船神社遺跡では、後期の石敷炉が検出されており、熱効率が向上した炉とさらに大型化した製塩土器を使用する量産化は、6世紀末から7世紀にかけて最盛期を迎えることになり、淡路島の古墳時代を特徴づける生産活動となる。

土器製塩が活発化する一方で、当該期を代表する遺構である古墳の数は少なく、特に前方後円墳は島全域を見渡しても現在のところ1基も確認できない。出土遺物などから前期・中期に築造されたと考えられる古墳は、洲本市のコヤダニ古墳や南あわじ市の委文古墳など、洲本平野や三原平野周辺で何基か確認できるがその数は少なく、島北部においては現在のところ1基も知られていない。後期にあっては小規模な群集墳が各所に築かれるものの、大規模な古墳は認められず、特に島北部にあっては小規模な箱式棺を埋葬主体とする墳墓が海を見渡す丘陵上や製塩遺跡の中に築かれる例が多く認められる。舟木遺跡の周辺においても、海岸部に営まれる製塩遺跡である畑田遺跡や富島遺跡で確認されているほか、海岸を見下ろす丘陵先端部に築かれた荒神の森古墳や築鼻山古墳などが知られている。

3 奈良・平安時代

奈良時代の淡路島は、中央部を境として北に津名郡、南に三原郡の二郡が置かれ、島全体を淡路国として統治される。淡路国府は三原郡に置かれ、それぞれの郡には郡衙が置かれた。津名郡に置かれた津名郡衙は、西海岸に面する北山で確認されている郡家長谷遺跡が有力な候補地として知られている。

古代寺院は、国府が位置した三原郡に集中する傾向が認められるが、島北部では7世紀末から8世紀初頭に創建された志筑廃寺が知られている。創建に用いられた藤原宮式軒丸瓦は、藤原宮所用6279b型式と同範であることが知られている。また、藤原宮6646E・F形式の瓦は、洲本市南部に位置する大野

古窯址群の土生寺窯で焼かれたとされており、津名郡と都城とのつながりの深さをみることができる。

古墳時代に最盛期を迎えた土器製塩は、奈良・平安時代にも継続しており、淡路島の塩は、他の海産物とともに淡路島が御食国とよばれる歴史を形づくることになる。これらを代表する遺跡には、前述の貴船神社遺跡のほかに並松遺跡や一本松遺跡などが知られている。なお、これらの遺跡で生産された塩が都に運ばれて消費されたことは、平城宮などで出土する荷札木簡からも知ることができる。いずれも調塩を送ったとみられる木簡に記された淡路国育波郷は、古墳時代の大規模な製塩遺跡である浜田遺跡が所在する淡路市育波に比定されるほか、淡路国来馬郷は古墳時代から奈良時代に継続する並松遺跡や一本松遺跡が所在する淡路市久留麻に比定され、それぞれの製塩遺跡との関係性が注目されるところである。

また、万葉集に編まれた和歌に詠まれた地名が数多く残る島でもある。都に近い海に浮かぶ島影は、瀬戸の海を旅する人々のランドマークとなり、細やかな地形の変化が生み出す風光明媚な島の風景は、都の歌人達によって、多くの詩歌に詠まれることになったものと考えられる。その内、播磨灘を望む「野島」は、潮の流れが激しい明石海峡の潮待ちの港として利用された地と想定されており、現在も和歌の刻まれた歌碑が建立されている。周辺には、古墳時代から営まれる製塩遺跡が多数知られており、『日本書紀』の履中天皇即位前紀に記される野島の海人の活動拠点とも考えられている。現在は、漁港として利用されている野島の港は、舟木遺跡が立地する丘陵の麓に位置しており、谷筋を縫って伸びる古道が二つの地域を結んでいる。

平安時代の遺跡は多くないが、淡路市多賀の老ノ内遺跡や久留麻の城原遺跡で掘立柱建物跡などの遺構が確認されている。前者は、津名郡衙に比定されている郡家長谷遺跡の近くに位置し、後者は平城宮木簡に記される来馬郷の中心と想定される場所に位置する。何れも奈良時代の官衙的性格を有する遺跡の近くに位置しており、律令体制下に営まれた集落景観を継承する立地となっている。

4 中世以降

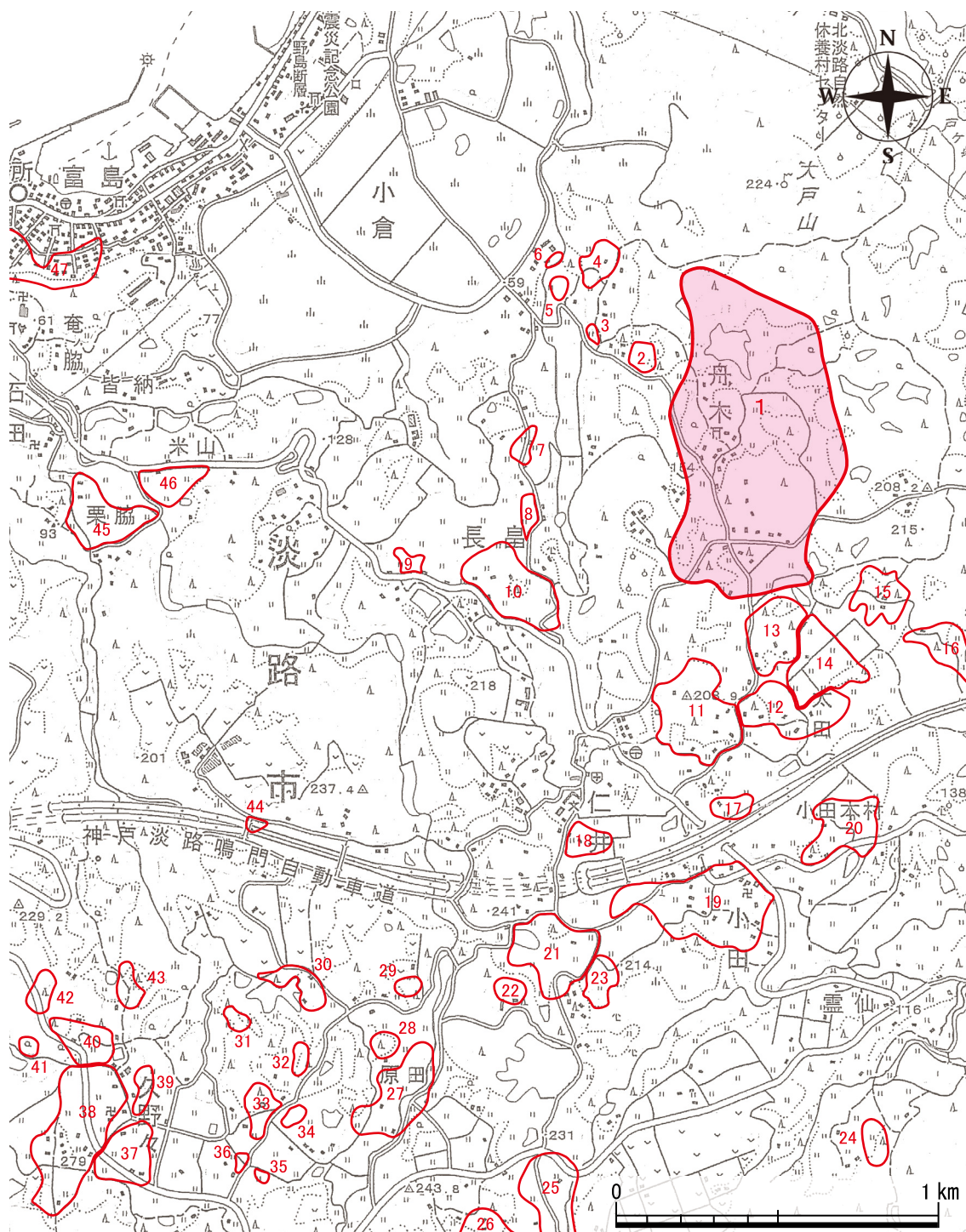
中世の遺跡としては、散布地を除けば、集落跡と城館跡に大別できる。これらの遺跡は、律令期の遺跡が確認されている立置とは異なる傾向をみることができ、小規模な遺跡が山間部にも展開する様相が認められる。その位置は、丘陵部に急増する弥生時代後期の遺跡と重複するものが多く認められる。舟木遺跡周辺においても、井ノ谷遺跡や将監遺跡などの遺跡が知られている。

また、この時代を代表する遺跡として城館跡がある。島北部においては、国人衆の居城とされる小規模な城館が各地に残されているが、いずれも海路や陸路の要衝の地に営まれたと考えられる。舟木遺跡の近くにも土塁が残る小田館や仁井館の存在が知られている。弥生時代後期の遺跡と重複する中世遺跡群の在り方なども今後注視する必要がある。

参考文献

- 山本誠 編著 2002『まるやま遺跡Ⅱ』兵庫県教育委員会
- 伊藤宏幸 編 2020『舟木遺跡Ⅰ（B・D地区の調査）』淡路市教育委員会
- 川吉智子編 2005『北淡町遺跡分布図』北淡町教育委員会
- 北淡町町誌編纂委員会 1975『北淡町誌』北淡町
- 深井明比古編 1998『佃遺跡』兵庫県教育委員会

伊藤宏幸編 2017『天神遺跡 発掘調査報告書【弥生時代編】』淡路市教育委員会
長谷川真編 1990『雨流遺跡』兵庫県教育委員会
的崎薫ほか 2017「平石遺跡（4次調査）」『南あわじ市埋蔵文化財調査年報Ⅸ 2013年度埋蔵文化財調査』南あわじ市教育委員会
定松佳重 2019「平石遺跡（5次調査）」『南あわじ市埋蔵文化財調査年報Ⅹ 2014年度埋蔵文化財調査』南あわじ市教育委員会
菱田淳子編 2018『井手田遺跡』兵庫県教育委員会
山田清朝編 1996『下内膳遺跡』兵庫県教育委員会
伊藤宏幸編 2011『五斗長垣内遺跡』淡路市教育委員会
種定淳介編 2003『ニツ石戎ノ前遺跡』洲本市教育委員会 兵庫県教育委員会
渡辺昇編 2007『富島遺跡』兵庫県教育委員会
大石雅一編 2012『富島遺跡発掘調査報告書』淡路市教育委員会
伊藤宏幸編 1999『引野遺跡発掘調査概要』東浦町・東浦町教育委員会
渡辺昇編 2001『貴船神社遺跡』兵庫県教育委員会
伊藤宏幸編 2002『貴船神社遺跡（製塩遺跡）』北淡町教育委員会
浦上雅史編 1992『淡路島の古墳時代』洲本市立淡路文化史料館
伊藤宏幸 2001「郡家長谷遺跡-第4次調査-」『津名郡埋蔵文化財調査年報Ⅲ』津名郡町村会
伊藤宏幸編 2004『志筑廃寺発掘調査報告Ⅰ』津名町教育委員会
渡辺昇 1993「浜田遺跡」『製塩遺跡Ⅰ（津名郡）』兵庫県教育委員会
大石雅一 1999「一本松遺跡」『津名郡埋蔵文化財調査年報Ⅰ』津名郡町村会
伊藤宏幸 1999「老ノ内遺跡-第2次調査-」『津名郡埋蔵文化財調査年報Ⅰ』津名郡町村会
工藤祥子編 2023『城原遺跡 発掘調査報告書』淡路市教育委員会



番号	遺跡名	時代	番号	遺跡名	時代	番号	遺跡名	時代	番号	遺跡名	時代
1	舟木遺跡	縄文～近世	13	尾花遺跡	弥生	25	瘠松遺跡	中世	37	中屋遺跡	弥生・中世
2	夏池遺跡	弥生	14	将監遺跡	弥生・中世	26	仁井石田遺跡	中世	38	久野々遺跡	弥生・中世
3	舟木原田遺跡	中世	15	薦ヶ巣遺跡	中世	27	柏田遺跡	弥生・中世	39	久野々下ノ開地遺跡	弥生
4	岩ノ久保遺跡	弥生・中世	16	小田向山遺跡	中世	28	原田六ノ郷遺跡	弥生	40	久野々原遺跡	弥生・中世
5	早稲田遺跡	中世	17	井ノ谷遺跡	中世	29	一橋池遺跡	弥生	41	金坪遺跡	弥生
6	片白遺跡	中世	18	仁井館	中世	30	おぎわら七口池遺跡	弥生	42	おぎわら遺跡	弥生
7	井の脇遺跡	中世	19	船原遺跡	弥生・中世	31	権田谷遺跡	弥生	43	繁谷遺跡	中世
8	浅原遺跡	中世	20	小田岡遺跡	中世	32	久野々大坪遺跡	弥生	44	井内谷遺跡	弥生
9	明神山遺跡	中世	21	上ノ開地遺跡	弥生	33	久野々原田遺跡	弥生	45	石田南遺跡	中世
10	長島夏池遺跡	弥生・中世	22	惣田遺跡	弥生	34	原田遺跡	弥生	46	石田北遺跡	弥生・中世
11	仁井東山遺跡	弥生	23	大平遺跡	弥生	35	穴郷遺跡	弥生	47	富島遺跡	縄文～近世
12	小田館	中世	24	又田遺跡	中世	36	鉢谷遺跡	弥生			

図2-5 舟木遺跡周辺の遺跡